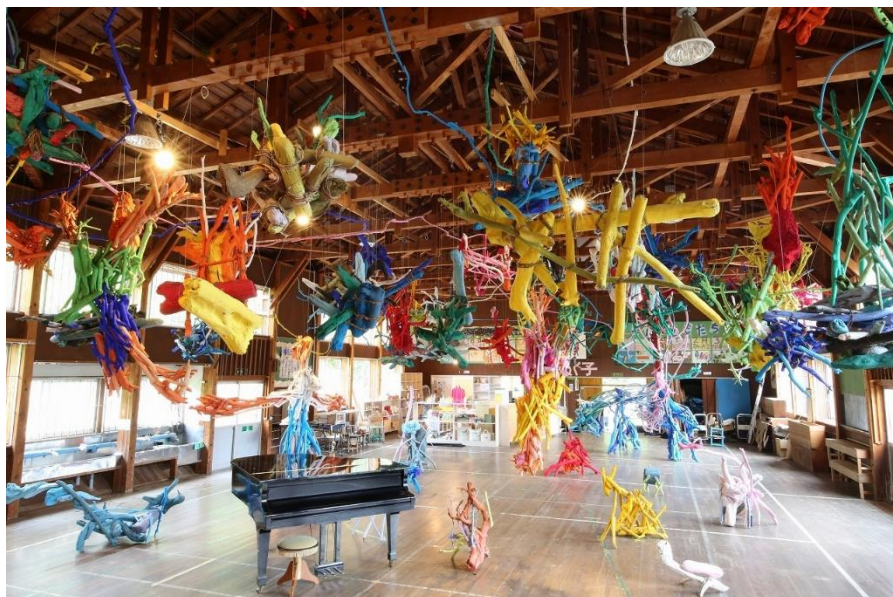


# 鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館 (NPO法人 越後妻有里山協働機構)



## Profile

「人は自然に内包される」を基本理念として、2000年から新潟県の越後妻有地域(十日町市・津南町)、「大地の芸術祭の里」を舞台として取り組まれている、現代アートを道しるべとして、様々な人の日々の営みや気候風土から生まれてきた景観などの地域の魅力を再発見していく取組。「里山」の暮らしが今も豊かに残っている地域で、1年を通して自然の中に作品を展示しながら、アーティストと地域内外の人々との協働の仕組みを創っています。

過疎高齢化の進展が著しい地域に共通する課題としての「廃校」や「空家」に、再び灯りがともっていく、子どもたちの元気な声が響く…。そうした取組が、大地の芸術祭の里における、これまでの様々な協働のなかで、輝きを増してきました。

こうした取組の象徴ともいえるのが「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」です。

山と山に囲まれた場所にある鉢という集落。その中心にある小学校(旧真田小学校)は廃校になり、2009年第4回大地の芸術祭アートトリエンナーレで集落の人々と絵本作家・田島征三によって小さな美術館となりました。一度はカラッポになった校舎を舞台に、最後の在校生と学校に住みつくとバケたちとの物語が校舎いっばいに広がる体験型の“空間絵本”美術館には、みんなの笑い声を食べて元気になる「トペラト」や、夢をべしゃんこにしてしまう「ドラドラバン」がいます。いつもなら、春の訪れと共に、集落の皆さん、地域内外の様々なサポーターさんたち、皆で冬季休館後のお掃除をして、雪囲いの羽目板を外して、お客様の元気な声を聞くのを待つ予定でした。でも今春は、校庭の桜の花が散って緑の葉っぱがよきによきと伸びて、田んぼの畦のふきのとうの茎が伸びる頃になっても、校舎には声が聞こえません。トペラトもなんだか元気が無かったみたいですが、早緑色の新葉がすっかり濃緑色になってきたこれからは、少しずつですが、きっと、子どもたちの声が野にも山にも里にも、学校や美術館にも、聞こえるようになるといいなあ…

里山は初夏の気配になりつつあります。美しい山間の棚田も、田植えがおわって、水鏡と早苗とが青空に映えています。越後妻有・大地の芸術祭の里、に皆さんがお越しいただけるようになるまで、学校のおばけたちも、里山の作品たちも、作品を大切に想って維持管理に心を配ってくださる集落のお父さん、お母さんたちも、みんな、元気でがんばりたいと思います。また、お会いできる日を、心待ちにしながら。